平成２４年度 第５回 鶴岡地域審議会

次　　第

日 時　平成２５年１月２８日（月）
午後３時～
場 所　鶴岡市職員研修会館

１　開　　会

２　あいさつ

３　報　　告

（１）今後の進め方について

（２）その他

４　協　　議

（１）各分科会協議テーマについて

「地域コミュニティ分科会」
「産業経済分科会」

５　そ の 他

６　閉　　会

第5回 鶴岡地域審議会 名簿

審議会委員

No.	所属団体・役職名等	氏　名	備考
1	鶴岡商工会議所　会頭	早　坂　剛	審議会会長(産業経済分科会)
2	鶴岡市町内会連合会　会長	山　田　登	地域コミュニティ分科会長
3	鶴岡市農業協同組合　代表理事組合長	今　野　毅	産業経済分科会長
4	鶴岡市自治振興会連絡協議会　会長	本　間　仁　一	地域コミュニティ分科会
5	(社福)鶴岡市社会福祉協議会　理事	茅　野　進	
6	鶴岡市民生児童委員協議会連合会　会長	竹　内　峰　子	
7	鶴岡市PTA連合会　副会長	若　木　敬　一	
8	NPO法人 鶴岡市体育協会　会長	稲　泉　眞　彦	
9	鶴岡市老人クラブ連合会　会長	後　藤　輝　夫	
10	鶴岡市婦人会連合会　会長	齋　藤　春　子	
11	鶴岡市消防団　団長	伊　藤　俊　昭	
12	学識経験者	竹　田　理　英	
13	学識経験者	菅　原　衛	
14	出羽庄内森林組合　理事	五十嵐　吉右衛門	産業経済分科会
15	山形県漁業協同組合　常務理事	田　村　勇　次	
16	鶴岡市観光連盟　会長	三　浦　惇	
17	(公社)鶴岡青年会議所　副理事長	今　間　智　寛	
18	学識経験者	丸　山　絢　子	
19	学識経験者	菅　隆	
20	学識経験者	奥　山　春　名	

市　役　所

No.	部課・役職名等	氏　名	備考
1	企画部長	秋　野　友　樹	
2	企画部次長(兼)地域振興課長	三　浦　総　一　郎	産業経済分科会
3	企画部地域振興課長補佐	武　田　壮　一	地域コミュニティ分科会
4	企画部地域振興課地域振興専門員	三　浦　裕　美	地域コミュニティ分科会
5	企画部地域振興課主任	前　田　哲　佳	産業経済分科会

平成２４年度　第５回鶴岡地域審議会　　地域コミュニティ分科会

１．これまでの主な意見

人口減少に伴うコミュニティの現状

・一世帯の家族数が非常に少なくなってきて個別化が進んでいる。
・郊外地では、市の中心部への家屋・家族の移転、また、高齢者が自分たちでは生活できなくなって若い人のところに移ったりするなど、郊外地の集落の空洞化、過疎化の状況。
・市街地でも空洞化している。まちの真ん中に空き家、空き地が多くなってきている。
・空き地についても権利があるので、すぐには解決出来ないのかも知れないが、利活用という考え方に方向転換をすれば、解決が出来るのではないかと思う。
・人口減少の原因は、魅力がないからだろうと思う。魅力のあるところには人は集まる。
・働く場が今後も確保できるのか、確保するためにどうするかが、人口問題から少子化のあらゆるものの根本になっているではないか。
・住んでいて、自然もあり風光明媚で人もいい。この先鶴岡を出ていった時に、２０代、３０代、４０代などの人が不安にならないようなＰＲの仕方を進めてもらいたい。

子ども・教育・子育て

・核家族や一人親家庭など、子どもの育ち方が昔と違う中で、今まで伝承されてきたものが続かなくなってきている。鶴岡の良さをこれからの子どもたちに伝えていくためには、地域の大人の力が必要。
・昔は隣近所のおじいちゃん、おばあちゃん達がたくさん出てきて、いろんなことを教えてもらい大人になったと思う。そこには、コミュニティや公民館という以前の、近所や隣近所というところが一番大きかった。
・地域に誇りを持っているということが、働く場を得て、実家で幸せに暮らしていることを、もっと大事にしていく必要がある。
・鶴岡の伝統や文化を子どもに伝える。
・インターネットフェイスブックなどが、これから広がり使っていく中で、様々な問題が出てくる。
・子どもの育成の問題も、親たち大人が手とり足とり親切にすることばかり考えている。
・小学校の統合でこれまでしていた地区の運動会が、子どもがいなくなったらどうするのかということで問題にされているので、第２土曜日に決まった教育の日などを、地域の教育の事業にしたり、世代間が交流していくような事業や活動をやっていく日にしたらよいのでは。

高齢者・高齢化に関すること

・いかに安心して子育てが出来るかも大事だが、子育てもが終わってからも、この地で

いかに安心して長生きできるかが大事。
・三瀬では、社協のモデル事業「おだがいさまのまちづくり」で隣組単位での見守り活動と支援について取り組んでいる。
・地域の中で支え合うことが、これからの時代必要。
・近隣の支え合い活動はどうあればいいのか、どうすればいいのか
・耳が遠くなった高齢者には災害時の伝達が難しい。昔ながらの半鐘を玄関につけて、乱打して呼びかける方法が一番有効ではないか。補助して欲しい。
・高齢者世帯（一軒）を隣近所三軒ぐらいでカバーするような複数の体制が必要。
・各世代間が高齢者も一緒になって本当に連携する。この連携強化こそが、その組織の連携を図ることであり、相互が対等、平等であることが大事。
・退職したらゆっくり静かに暮らせると思っていたが、次から次へといろいろな仕事が回ってきて、とても余裕がないのが今の年寄りの現実。６０歳、６５歳を越えて自由な時に、社会のために、町内のために何かしたいなと思っている人がたくさんいて、積極的に取組んでいるというのが現状。意外と時間がないというのが現実。

コミュニティづくり・地域づくり

・防災でも福祉でも、それをきっかけに地域を興していくことは必ず出来る。
・実際のコミュニティで４６８ある自治会等の枠組みも同列ではないし、地区によって名称も違うので、それを一括りにすることはなかなか出来ないと思う。
・小学校区のエリアだと、同じ楽しみ、苦労を共有していて、子どもから年配の方までまとまりがある。小学校の学区再編などがある中で、中学校区のエリアを一つの枠組みとしてのコミュニティに力を入れてはどうか。
・町内での防災訓練の参加はよくない。参加が多いのは夏祭りや草むしり。
・地区が小さいと人がいないが関わりがある。学区は人は多いが出てこないといった現状の中で、一人でも二人でもつなげていければ、コミュニティという形が変わってくるのでは。
・その地域をいかによくしていくか、暮らしやすい地域にするかということがコミュニティの基本。
・コミュニティの役割は、地域で生れて亡くなるまで、住んでよかった町にすること。
・住民を巻き込んで、自分たちで問題になっていることをやるべき。
・隣近所の絆づくりをどうつくっていくかがまちづくり、コミュニティの基本。
・地域と一緒になった防災のあり方。
・防災に対しての強いまちにしたいと考えた時、地域の人が自ら声を上げ、手を挙げて、行動できる人たちの集まりの地域になれば、自然と盛り上がるのではないか。
・一人暮しの高齢者などには、災害の場合は声かけをして、一緒に何とか逃げようということを目標にして、隣組単位に福祉員を設けて、目配り気配りをしてもらっている。年１回集まって情報交換や突っ込んだ話合いをして、そこに住んでいるお年寄りの方が安心して暮らせるようにしようという活動をしている。

地域のつながり、コミュニケーション、情報

・住民同士の話し合う場が今非常に少なくなってきている。話し合いの場をどのようにつくればいいか。
・各団体・組織の連携をどのように図ればいいか。
・住民同士は横の連携が大事。
・インターネット、フェイスブックなどのツールを使っての行政への書込みを、利用しながら行政業務をやっていくというのが、これから市にも求められるのではないか。
・ホームページを見てと言ってもなかなか見ないような気がする。チラシ 1 枚があってさっと見てからだと、ホームページを見る。
・インターネットも自分に必要ないものは検索しない。
・安心して暮らせる地域づくりでは、情報をどのように各家庭で手に入れられるのか。

２．今後の議論の展開

住んでよかったという地域づくり、幸せに暮らすことができる地域づくりに向けて

（１）これまでの議論から

少子化・高齢化と人口減少、核家族化、ライフスタイルの多様化などにより、社会生活の基盤であるコミュニティの現状は昔と違ってきている。しかし、子どもから大人まで、どの世代にとっても、安心・安全に、人とのつながりをもって、いきいきと健やかに暮らすことが出来る地域であり続けることを目指して、コミュニティ・地域づくりを進める必要がある。

これまでにも、様々な取り組みがなされてはいるが、これからの地域づくりに必要な取り組みや仕組みづくりを検討し、そして、「この地域に住んでよかった、この地域が暮らしやすい」と言える地域社会を構築していく方策を検討していく必要がある。

（２）今後の議論の方向性

①地域の各種団体活動の連携を図り、地域のコミュニケーションを図るための仕組みづくり、誰でも参加できる交流の場づくりを図る必要がある
➢住民相互のつながりや、地域の人材活用・育成のためのコーディネート機能

②超高齢化社会に対応して、10 年後、20 年後も見据えて、安心して長生きできる環境についての方策
➢高齢者に優しく、安心して暮せるまち、交通対策
➢高齢者の働く場、生きがいづくり

③若い世代が子どもを産み育てやすい環境、安心して子育てが出来る環境への方策
➢子育てを地域で支える。核家族から多世代へ。

④子どもに鶴岡や地域の伝統・文化を伝える取組み（伝統行事の保存・伝承活動）

⑤空き家の活用は少なく、地域の安心・安全面、衛生面、景観などに影響があり心配されるなかで、利活用という考え方に解決の糸口が見出せないか。

⑥自主防災組織、消防団はあるが、さらに、災害等に強いまち、地域づくりとするための活動や取組みを考え、地域防災力の向上を図る必要がある。

⑦情報をどのように手に入れるか、また、情報の共有化を図る必要がある。

平成２４年度　第５回鶴岡地域審議会　　産業経済分科会

１．これまでの主な意見

人口減少に伴う産業経済分野の現状

・中央に集まった人口をいかに地方に分散させるか。地方のほうが働きやすく、住みやすい地域にしていくという目的を共有しながら、価値観を地方に分散させていく。
・地元に対する良い感じはあまり持っていなかったと思われる人たちの、意識、価値観をいかに変えていくかが大事になってくる。
・働く場や官庁が東京に集中していることが問題。
・人口減少に伴い、産業やコミュニティが縮小し、活力を失うことが予想される。
・中山間地域においては、耕作放棄地が増加し集積が進まない。
・農業、漁業の担い手不足、後継者不足、生産者の高齢化。
・様々な問題の根幹にあるのは、安定した職業、安心して暮らせる社会環境の整備。
・空き家が多いので、空き家の利活用を図る。
・定住人口プラス交流人口をどう増やしていくか。
・鶴岡の自然的、文化的、歴史的な強みをどう活かしていくか。

各産業の現状

・農業は地場産業であり、不利な立地・気象条件の中でいかに活性化させていくか、また、メロンやだだちゃ豆などを中心に米の低価格傾向を補完する形で取り組んできた。
・市全体の約７割を森林が占めており、今後いかにこの資源を活用していくかが課題。
・代替エネルギーが話題を集めている。軽いものを圧縮したものは強いエネルギーになる。杉の間伐材を利用したペレットや水力発電の可能性がある。
・魚さえ獲っていればいいという時代から、ヒラメやアワビなどの稚魚・稚貝の放流など、「つくり育てる漁業」を推進。
・山形県は、農業県というイメージが強いが、庄内浜には大小合せて１８の港湾・漁港があり、うち１４は鶴岡市にある。
・観光は第一次産業から第三次産業に関連する裾野の広い業界で、様々な特色を活かしながら、どう結び付けていくかが課題。

雇用の創出、産業の創出

・定住人口の増加のためには雇用の場や確保が必要。
・農業、観光、工業に企業を貼り付けながら、いかに働く場を安定的につくっていくかが課題。
・農業が地場産業であるということを、多くの方々に認識してもらい、また六次産業化などと絡め、様々な業種と結びつけながら、地場産業の活性化を図る。

・農業や漁業や観光など、様々な産業が一体となって進めていかなければならないし、様々な産業と連携しながら、すばらしい自然や食を体験してもらう、また、魅力を引き出していく。
・最近は庄内だけでなくて県外や内陸から漁師になりたいという人がちらほらいる中で、漁業者自体も意識を変え、こんなにいい商売であることを自分たちが意識しないと、他から来た人たちに魅力ある商売であるということが言えない。
・産業と直結する部分で雇用、その雇用は定住化に結びついていくという話だと思うので、既存の産業または資源を活かしていくことに焦点を当てて、市の施策として雇用創出の方にも進めて欲しい。
・今まで鶴岡に関わりを持っていなかった人、I ターンに結びついていけるような産業の新しい創出の仕方を一つずつ作り上げていくことが必要。
・鶴岡の良さである食の部分、課題になっている部分を逆手にとって産業に結びつけるような、再生可能エネルギーについても既存の産業と極めて密接に結びついていくところで、新しい雇用創出や起業という形で事業を起こることにも結びつく。
・交流人口を増やすために観光から産業が生まれてきた時に、観光に携わった人たちが帰って来るのではなく、観光から生まれたサービス業を展開した時に、外でのノウハウを持っている人が帰ってきて、自分の仕事として作り上げていく。
・食文化産業創造センターで在来作物や食に目を向けて創出しようとしている中で、既にやっている取り組みであっても、鶴岡で取り組んでいるのだということを、我々も共有して、文章化にして発信することが、雇用創出の一歩になると思う。
・林業を産業の一つとして位置付け、製材業、搬出業、代替エネルギー関係といろいろ地域の大きな雇用の場になりうる。
・国がやらなければ、特区みたいなものをつくり、市がやるということを提案する。
・行政、民間、市民が一体となって進める受け入れ体制づくり。

魅力の再確認と発信

・鶴岡の良さが、海や山や里は魅力的なことがまだまだ知られていない、良さがアピールできていない。地元の人が気づいていない。
・鶴岡は豊かな自然、環境、食料など子育て環境として最適。
・地域の人々との交流を通じ、地域の結束や子供達を見守る気持ち、コミュニティの大切さを感じる。
・鶴岡をもっと広告、宣伝していく力、移住者情報などをチラシにして情報発信。
・地元の人が普通に思っていることを県外の人に伝えたり、鶴岡を体験してもらう場や機会を多く創る
・自然や人とのつながりなど、もっと発信できるような場や方法がない。
・我々が当たり前だと思っていることが、他から来た人は全然違う視点で見ている。それは財産であり、その財産をいかに生かしていくかが課題。
・他の地域、都心部と比較して、いいよだけではなく、例えば、子育てするには自然が

近くにあるとか、小さいエリアでまとまることが出来るという強みを持っている違いを、もっと積極的に恐れずに出していく。
・体験観光ツアーや創作的な体験メニューの充実。一つの体験だけではなく、農業体験をしてどこかに泊まり、海も体験するなど、ストーリーを作って一つのツアーのようにするなど、大きく考えてもいいのではないか。
・この地域を見て良さをどんどん言ってもらい、足りないところを指摘してもらい、我々が改善する、または、受け入れる体制、受け皿を作ってくことが大事。

体験からの情報発信

・地域産業を掘り起こしながら、体験観光をいかに育てていくかが大きな課題。
・いろんなコネクション、既存のものでも十分に活用していけば、次につながる方法や体験を通して、ここはいいところとか、都心部でないところに行ってみたいというきっかけになるので、体験が出来るような方法をつなげていく事が必要なのではないか。
・農業、漁業、森林分野でも、食に関わらないで子ども達が生活していることを考えると、こちらに来た時にどんな産業でも、食に関わっているということで、携われる、見れるようなことは魅力に感じるのではないか。
・体験型観光や修学旅行など後に繋がっていくために情報をいかに発信するかのＰＲと、受け入れ態勢をどう確立するかの両方で進めていかなればならない。
・体験するのは、コーディネートする人がいることと、体験出来る場があってしている。楽しいということが、また来たいと思う要因になるので、それには演出が大事。

インターネットなどの活用

・旅館やホテルなどは、インターネットを通じてかなりの誘客を図っている。
・フェイスブックは情報がリアルタイムで、どこにいても情報が得られる。人を呼ぶ手段としてフェイスブックを上手く活用していく。
・「Ｕターン　東北」で検索すると、分かるようにＰＲ出来る方法があったら、ホームページで検索すると引っかかるような情報を入れたり、フェイスブックを活用したりする方法が出来ないか。

コーディネーターの育成

・トータル的なマネジメントや組織づくりは、定住化に絶対に必要。
・人口も減っていく中で、今までと同じ事しかやらないなというのでは意味がない。
・コーディネートするような人材を育成する方が同じ税金の使い道としてはいいのではないか。今の雇用基金の使い道も、地域に貢献するような、一定の事業やそういう目的で使われているとは思う。使い道として雇用創出を組み入れてくれたりすると、意外と地域に埋もれている人材に光が当たったり、あるいはＩターン・Ｕターンとして外に出た人がノウハウを持ち帰ってくれる人がいたりすると思う。

２．今後の議論の展開について

定住、移住促進に向けて

（１）これまでの議論から

少子化と人口減少が進行する中、定住、移住促進の施策の推進については、これからの地域社会の構築に必要不可欠であり、これ以上人口を減らさないために、鶴岡の人口が増えていくために、各分野や各産業方面からの多角的な視点での方策を考える必要がある。

（２）今後の議論の方向性

①雇用の場の確保と産業の創出

②鶴岡の魅力、良さ、強みを魅力的な情報発信をする仕組み、方法、アピールの仕方

③地場産業の後継者不足、高齢化に伴う労働力の不足を解消

④若者の定住、Ｉターン・Ｕターンにつながる仕組みづくり

⑤住む場所の確保、空き家の利活用に向けた取組み

⑥体験観光、体験学習、体験就業など、鶴岡に住んでいない（外の）人への体験に関する体制、連携、役割分担の構築